中田遺跡調査報告II

昭和49年度国庫補助事業
中田遺跡範囲確認調査

中田遺跡

1975年3月

八尾市教育委員会

はしがき

八尾市教育委員会
教育長　青　井　富三郎

昭和45年より八尾市中田地区において八尾都市計画曙川北土地区画整理事業が行なわれた。この事業に伴って発見された「中田遺跡」については昭和47年10月から昭和48年9月にかけて道路敷面下約1万㎡の発掘調査を実施した。調査で出土した多量の遺物をはじめ諸記録は現在整理中である。

この発掘調査によって「中田遺跡」は約1700年前の弥生時代後半期から室町時代末期までの約1400年間に亘る各時代の複合集落跡であること、わけて平安時代末期から鎌倉時代を通じての2世紀間は寺院を中心とした大規模な集落が形成されていたことなど古代における市内平野部の開発と土地利用過程にかかわる多くの新知見を与えるものであった。

発掘調査終了後、計画道路の整備をはじめ付帯施設の工事は引続き進行中であるが、更にこの「中田遺跡」の性格、集落規模、文化相などを明確にするため教育委員会では昭和49年度国庫補助事業として遺跡の範囲確認調査を実施することになった。

調査は前回の事前調査と異なり、調査対象地はすべてが民有地で、また耕作予定地でもあった関係上、当該地の所有者には多大の迷惑をお掛けする結果となった。しかし、所有者各位は調査の趣旨を諒とせられ絶大の便宜と御協力をいただき、きわめて順調にその目的を完うすることができた。

ここに調査報告書を上梓するに当り、記して深く感謝の意を表する次第である。

昭和50年3月

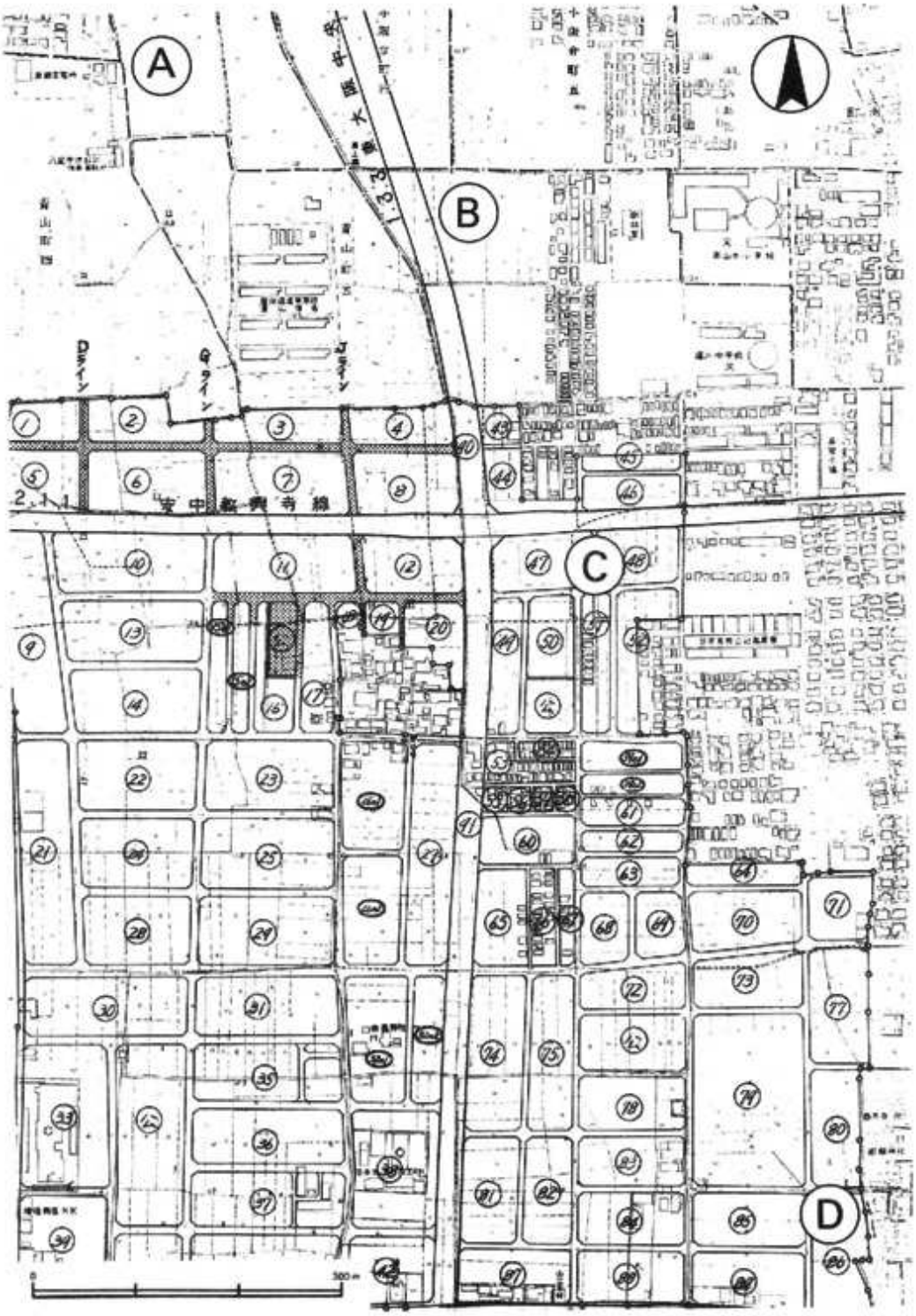
例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が、昭和49年度国庫補助事業（総額1,000,000円、補助率国庫50%、府費25%）として実施した中田遺跡範囲確認調査の報告書である。
2. 調査は八尾市教育委員会の山本　昭を担当者とし、昭和49年7月26日から9月3日まで実施した。
3. 調査の実施については、吉岡　哲、松坂幸一を調査員とし、吉村正代、杉本二郎、寺川史郎、松尾信裕、松岡良憲、阪田育功、高木真光、吉田寿美子、佐藤恵子の各氏をはじめ、多くの方々の協力を得た。
4. 調査に際して実測図、写真をはじめスライドなどの記録をとった。ひろく利用されることを希望したい。

目　　次

はしがき
例言
1. 調査の経過と概要 …… 1
2. 中田遺跡の立地 …… 3
3. 調　査
〈A地点〉 …… 4
遺構・遺物
図版・考察
〈B地点〉 …… 10
遺構・遺物
図版
〈C地点〉 …… 13
遺構・遺物
図版・考察
〈D地点〉 …… 24
遺構・遺物
図版・考察
まとめ

中田遺跡範囲確認調査地点位置図



1. 調査の経過と概要

昭和47年10月から翌48年9月にかけて実施した中田遺跡の発掘調査は区画整理地全域からみると北西の一部で、多くの新知見を得ながらも、なおその範囲は楠根川以西に限られたものであった。

まず北方への拡がりと小阪合遺跡との関連については、調査区D・Gラインの更に北方へ遺構が拡がるようである。一方調査区東寄りのJラインにおいては「和同開珎」の出土があったものの顕著な遺構には接しなかった。従ってD・Gライン北方で隔たらない地点に調査地を選定する予定にあったが、予定地の土地利用現況などの都合によって更に400mの北にA調査地を設定した。

楠根川左岸約25mばかりの川沿い地帯は若干の遺物の混入はあるが遺構は存在しないようである。このことは中田遺跡発掘調査の結果によって想定されることがらでもあった。同様のことが楠根川右岸についても言えるものかなどの表面観察も含めた考古学的知見は全く未知の現状であった。そこで北方では川の東方約30mにB調査地を設定した。以上の北方2地点は中田遺跡の北限および北東端を探査する目的のものである。

引続き楠根川以東の区画整理地内にC・Dの2地点を設けた。この地帯は旧大和川枝流の玉串川左岸の川床および氾濫原に近接しており遺構の存在は想定されなかったが、旧大和川以前の古大和川とも呼べる流路が中田遺跡発掘調査地内で認められるところから、古墳時代前期以前の遺構の遺存が考えられないでもなかった。調査結果は別項のとおり弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が出土し上述の河川流路変遷の想定を一歩進めるものであった。

以上北方に2地点と東方に2地点の計4箇所に対してトレンチ発掘を実施した。この結果中田遺跡年代のうち最も古い弥生時代後期と古墳時代前期の遺物が楠根川を更に東へ隔った地点にも埋没していることが判明した。

北方は小阪合遺跡と何程かの距離をもって集落は区分されており近世の集落散在の原形を窺うことのできるものであった。この内とくにAについては条里

制遺構と推定される畦畔の痕跡が認められ、この一画が河内国若江郡条里制内の水田地帯であったようである。またDについては古大和川枝流路の一つと考えられる水路に堰が設けられていたようで、中田遺跡地内に見られたと同様に中田一帯における耕地管理や農耕の実態を推測させる資料を提供するものであった。

一般に河内平野の開拓は河内に大王陵の築かれはじめた5世紀前半にはじまると考えられている。このことは中田遺跡C～E区に見られる大がかりな整地層のひろがりからうなずけることではあるが、やはり5世紀開拓の土台となる河内平野微高地への定着と、不安定な古大和川の支配と利用は早く弥生時代前期の稲作開始と同時に積極的に手がけられ、古墳時代前期の頃には自然に形成された耕地に対し更に積極的な耕地管理の形をとって開発は進められたものであろう。

河内平野の各所には古大和川流路網に対して大小いくつかの多目的堰が構えられていたことを推測することができる。中田遺跡において堰と認めた施設が果して農耕目的のそれであったか、ないしは、氾濫からの集落防御の目的のものであったかなど不明であるが河内平野の集落、農耕地変遷を考察する上での一資料となるものであろう。

2. 中田遺跡の立地

河内平野は南から北へと陸化の進んだ沖積平野である。長年月に亘ってこの平野を育ててきたのは旧大和川であった。奈良盆地の水を集めて流出する大和川と、河南盆地から北流した石川は柏原市役所前で合流する。合流後は下流にいくつかの枝流をつくり各所に小デルタ微高地を造成した。そして流端は東大阪市北域にあった鴻池の大湖沼につながるものであった。この大和川、石川2河川は合流してから流端末の鴻池までは僅かに10Kmばかりの距離であるが、水量の豊かさと流速のゆるやかなこと、土砂搬出の比較的豊富なことなどの条件は通例の河口三角州形成の様態と同様である。大小河川流路の安定に伴ってやがてそれら小デルタは除々に統合され広範な耕地として利用されるようになってきた。更には降って江戸時代中頃の大土木工事大和川付替はこの耕地化現象を決定的なものとし、鴻池の干拓、埋立とも相俟って今日の河内平野が出現した。したがって平野部の地下にはかつての河川流路の名残りである地下伏水を多量に抱き込んだ大小の砂層が網目状に埋没している。

旧大和川は石川と合流したあと八尾市二俣の地で長瀬川と玉串川に分流する。この二分流が何時の頃に遡るものかは明らかでないが両河川とも多くの砂礫を推積した天井川となって北流し、増水期にはしばしば氾濫を起し流域の耕地集落を悩ませた。この旧大和川も新川付替以後は河川というよりもむしろ機能的にも用水路に近い規模となり、旧河床の大部分は畑新田として更生し木綿栽培に面目を一新した。一方流端末の鴻池の大湖沼も急速に開拓され新田が出現する。

中田遺跡はこの旧大和川が「二俣」で分流する流路に安定した時期以前の自然流路に沿って生まれた集落跡であるが、年々出水氾濫による水田の流失はもちろん生命の危機にさえさらされながらもなお頑強に土地を放棄することなく集落を存続させ得たものは、やはり河川の搬出した肥沃な土壌と恵まれた用水が与える豊かな収穫への魅力であった。

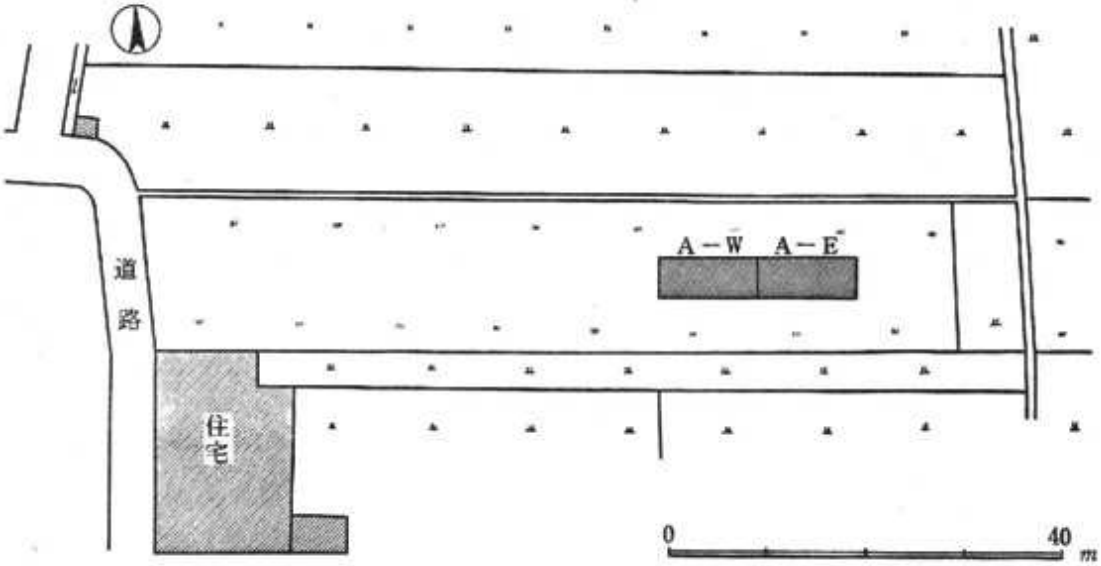
3. 調　　査

遺　構

今回発掘調査を実施した4地点〈A. B. C. D.〉のトレンチのそれぞれについてE（東）W（西）S（南）N（北）に小区割をした。さらに各トレンチ内で深層部調査のため深く掘り下げた部分（グリッド）もある。

A地点調査前（青山町3丁目39番地　西から）

A地点調査位置図



〈A 地 点〉

遺 構

本地点は青山町3丁目39番地で現在休耕地となっており、東西に長く条里制長地型1反歩の面積に当る土地である。周辺は水田、畑地と新興の住宅となっている。

調査にあたっては東西10m、南北4mのトレンチを東西方向に2ケ所設定した。東方をA－E、西方をA－Wとした。

両トレンチの第1層（耕土）を除去した段階で東西方向の大溝を検出した。上部巾は約3.5mである。第2層は淡黄褐色砂質土、第3層は灰黄褐色砂質土で、これが溝の上縁となっている。溝内は上層から暗灰褐色砂質土（A層）、灰茶褐色砂質土（B層）で、いずれも粘着力に乏しい。溝の埋土、ないしは整地土かと察せられる。溝底は中央部が凸状となり両側は断面がU字状の小溝となっている。この南北2条の小溝はA－Eの東端で巾30cm、深さ8cmそしてA－W西端で巾60cm、深さ16cmとなり東西両端でかなりの差が認められる。小溝内はA－Eの東端で茶褐色を含む灰色細砂（C層）、いっぽうA－Wの西端ではC層の下で灰色細砂（C′層、C層よりやや粗い）となり東西端で若干のちがいがみられる。なお溝底は酸化鉄分の沈澱によるものか赤褐色の固い層となっている。中央部の高まりは、巾100～130cm、両溝底からの高さ10～20cmを測り、茶褐色砂粒を含む灰色砂質土（D層）で、その上面は若干凹状を呈するものである。

第4層は茶褐色の砂質土で、整地層とおもわれる。以下第5層（灰茶褐色細砂層）、第6層（酸化鉄分を含む灰色粘土）、第7層（青灰色粘質土）と続いている。A－Wの第7層では土師器大形皿1点が出土した。

これらの層序から第6層の青灰色粘質土と第7層以下は河川ないしは沢沼地で水生植物などの生えていた土地であった可能性が強くここに埋土、置土がなされ第4層、第5層が形成されたと考えられる。第4層と第3層は耕地面として使用され、上記のD層が水田を区画する畦畔ないしは農道で、これに沿う2条の小溝は用水路かと推定される。

遺　物

遺物出土量は比較的少なかった。A－E、A－W両トレンチの第4層までは土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・土釜・鉄釘が認められた。溝内第1層（A層）、同第2層（B層）からは土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・屋瓦・鉄釘などが、小溝内C層からは土師器・須恵器・瓦器・陶磁器など、またD層では土師器・須恵器・瓦器が出土している。第5層以下ではごく少量の土師器が認められた。

上記のうち、下述するもの以外はいずれも小破片であるため、その形態・整形などについては不明であり、実測不能のものがほとんどであった。

〔椀〕

淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。高台のみであるが、復原径6.3㎝、高さ0.8㎝を測る。

〔皿〕

底部は欠損しているが、口縁部は直にたちあがったままのつくりである。赤褐色を呈する。全面磨耗のため、整形技法などは明らかでないが、底部外面にわずかに指圧痕が認められる。

〔摺鉢〕

ⓐは外面灰褐色、内面茶褐色を呈する。1～1.5㎝巾で現存12条櫛目により2～3㎝の間隔をおいて施されている。器厚は0.6～0.8㎝である。丹波焼であろう。

ⓑは内外面とも紫褐色で、0.1㎝以下の細い現存7条櫛目で0.3㎝の間隔をもってほぼ平行に施されたものである。近世以降の備前焼であろう。

〔土釜〕

ⓒは瓦質の羽釜である。内外面とも黒灰色で、器肉は淡灰茶褐色を呈する。胎土内には石英粒を多量に含む。ツバ外縁復原径（以下ツバ径と略す）は33㎝である。口縁部・胴部は欠損しているので全体の形状は不明であるが、口縁部には外面に段を有するものであろう。

ⓓは土師質の羽釜である。内外面とも淡黄褐色を呈する。ツバ径は25㎝で、

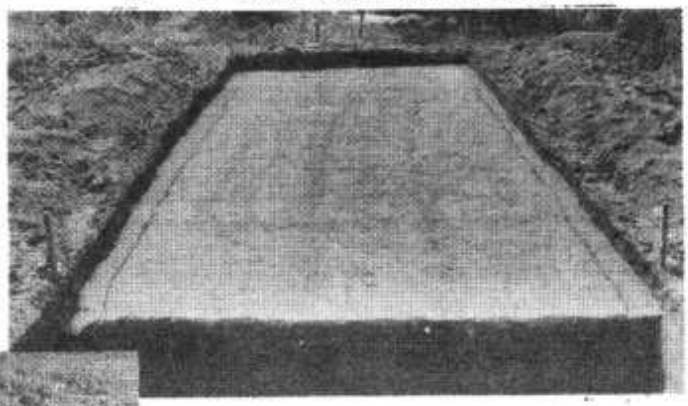
その断面は小さな▷形を呈する。全体に器厚は0.3㎝と薄手でやや小形のものである。口縁部は内弯し、横ナデ仕上げである。

〔鉄釘〕

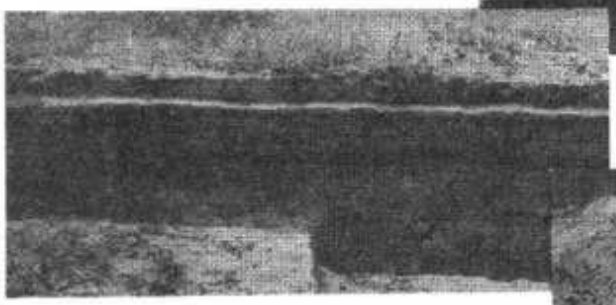
ⓔは先端部で、現存長約4㎝を測る。横断面ほぼ1辺1㎝の正方形である。

ⓕは断面長方形を呈するものである。先端は欠損しており、他の一方は折れ曲っている。

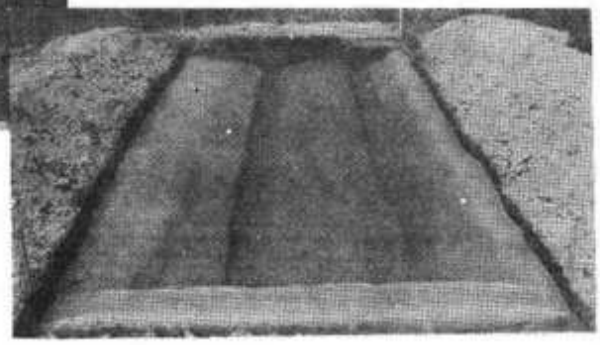
A－W　大溝（第2層上面 東から）



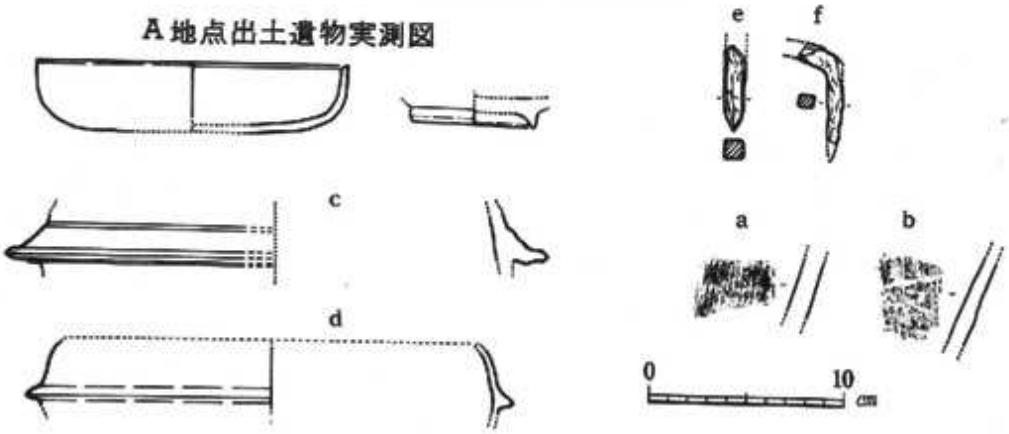
A－W　畦畔遺構断面図



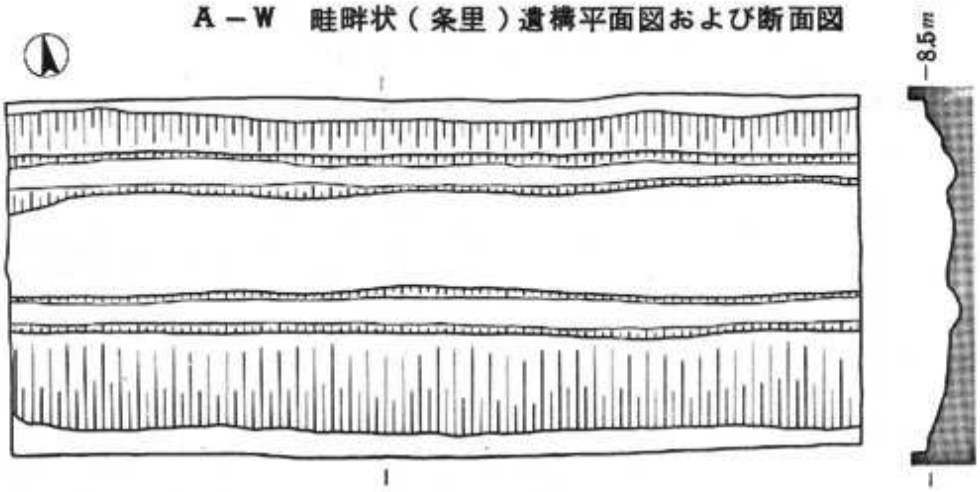
A－W　畦畔溝遺構（北から）



A地点出土遺物実測図

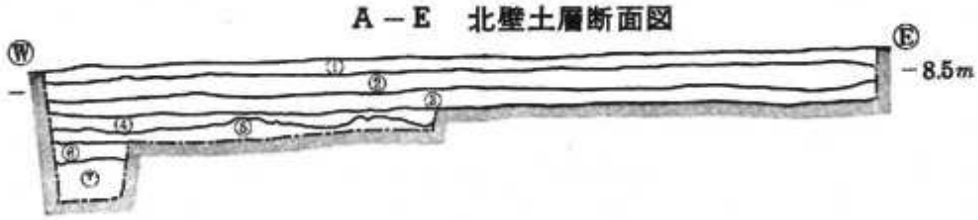


A－W　畦畔状（条里）遺構平面図および断面図

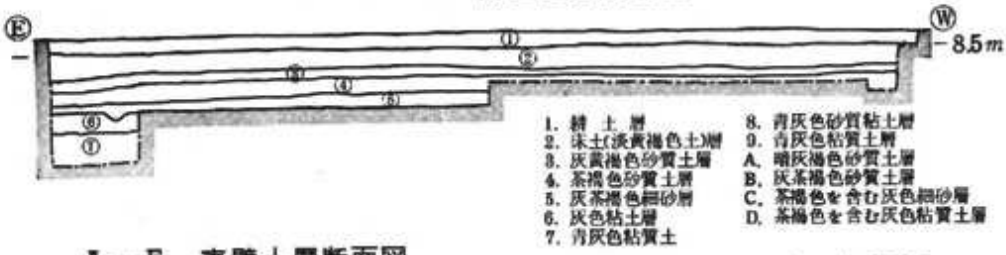


A地点土層断面図

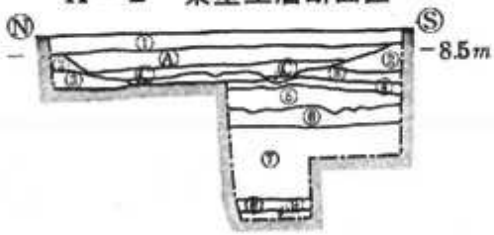
A－E　北壁土層断面図



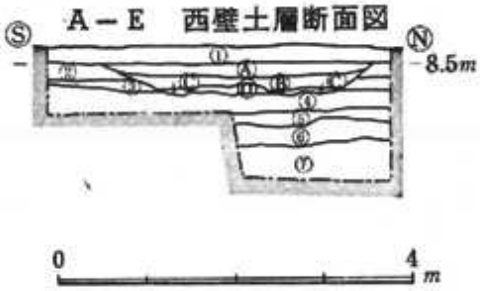
A－E　南壁土層断面図



A－E　東壁土層断面図



A－E　西壁土層断面図



0　　4 m

遺構に対する考察

中田遺跡周辺の古代は旧大和川の枝流、玉串川と長瀬川とによって大きく4郡に分かれている。すなわち玉串川以東に高安郡、玉串川と長瀬川のデルタ地帯は若江郡、そして長瀬川以西の南寄りに志紀郡、北寄りに渋川郡である。従って中田遺跡および〈A〉地点は若江郡内であり推定郡域内の南に寄った地域である。この若江郡は条里遺構の比較的良好に遺存している地域で部分的に「坪名」も見られる。いま地図上で概略復原を試みると上記の4郡はいずれも共通した区割りに乗っており、とくに条線は玉串川、長瀬川を起えて東西にのびている。〈A〉地点が若江郡条里のどの位置に当るかは正確にし得ないが、〈A〉地点水田の一帯の畦畔が条里坪割り中の1つにあることはあきらかである。

発掘調査による条里制遺構についての資料は漸次増加しているが遺構の時期、形状については未だ十分のものが見当らない。〈A〉地点で検出された畦、溝状の遺構が果して条里制遺構であるのか否かの確証は得られないとしても、今後における条里制調査の一資料として記録しておきたい遺構である。

〈 B 地 点 〉

遺 構

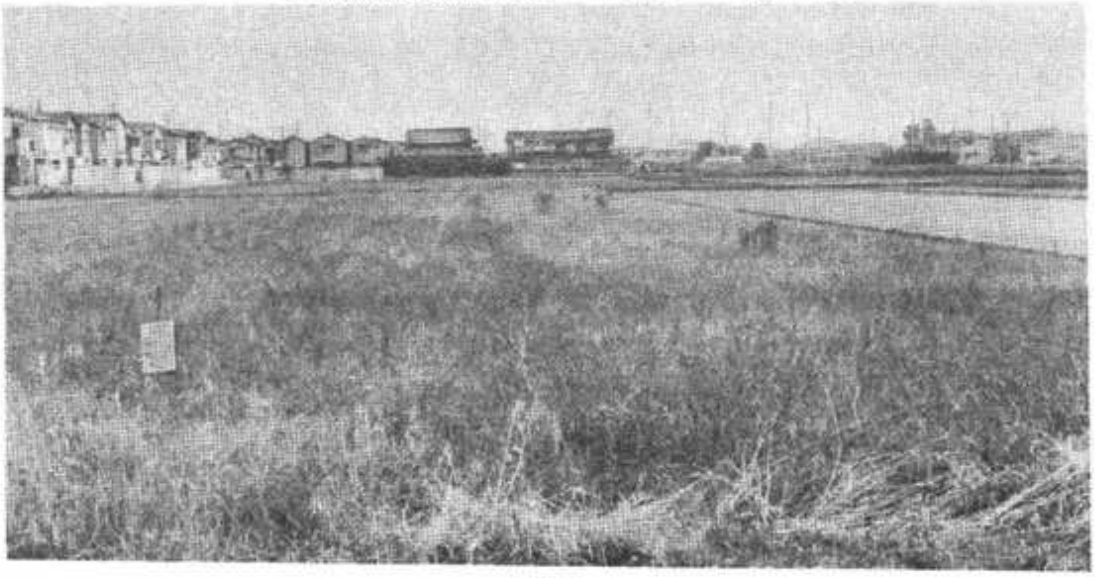
本地点は別宮42番地の1で、現在休耕地になっており、南北に長い土地で条里制長地型1反歩に当る。北縁は東西方向の道路で区画され他は水田に囲まれている。

調査にあたっては、東西2m、南北10mのトレンチを北方に、さらに南方20mを隔てた地点に、東西4m、南北10mのトレンチを設定した(B−N、B−S)。

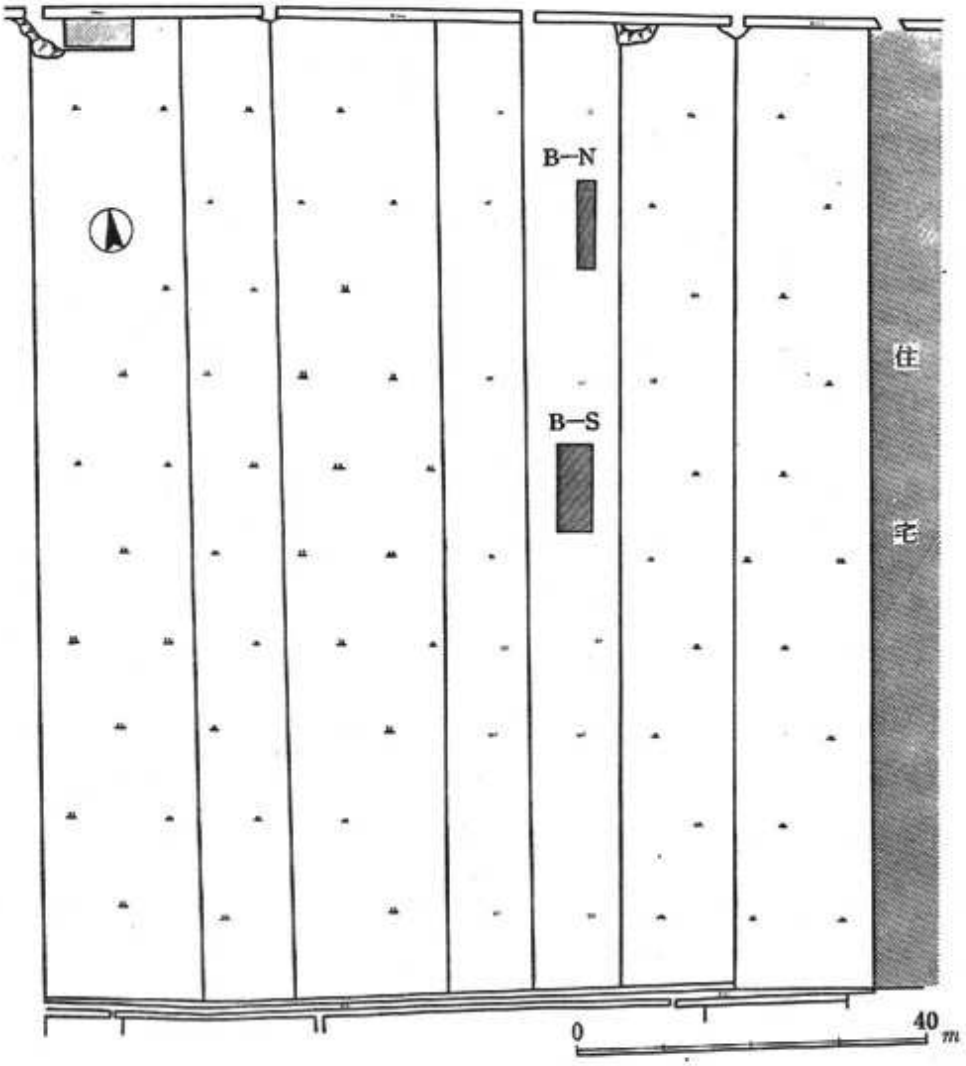
結果はB−N、B−Sとも層序、出土遺物に大差のない状態であることを確認した。第1層(耕土)を除去し、第2層(茶褐色砂質土)を掘り進めたところ、土師器・須恵器・瓦器片などが若干出土した。また、第2層とほぼ同レベルで、これと質を異にする茶褐色細砂層(第2′層)が認められた。第3層(灰色粘質土)では瓦器片が若干出土し、第4層は酸化鉄の沈澱したうすい層があり、第5層以下は青灰色粘質土であった。

以上のように、B地点においても下層ではA地点とまったく同様の地層で、この地帯がかつては河川あるいは沢沼地であったことが想像される。ただ、A地点とちがうところはB地点には古い時期の耕土面らしい層が認められず、近世の耕土面だけしか認められなかった。それは、この地がA地点にくらべて水はけの悪い土地であったものかと察せられる。

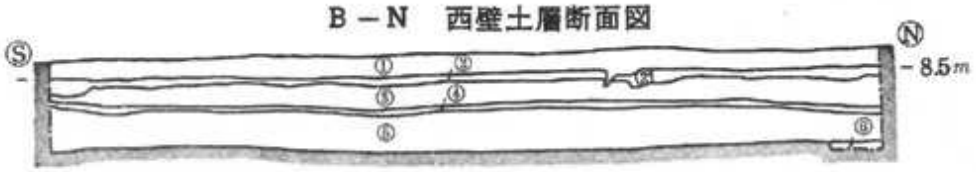
B地点調査前(別宮42番地の1 北から)



B地点調査位置図



B − N　西壁土層断面図



B − S　西壁土層断面図

① 耕土層
② 灰茶褐色砂質の粘質土層
③ 茶褐色細砂土層
⑤ 灰色粘質土層
④ 明黄褐色粘質土層
⑥ 青灰色粘土層
⑧ 青灰色砂質粘土層

遺　物

〔皿〕

復原口径13㎝、同高さ2㎝、厚み0.5㎝を測る中型皿である。淡茶褐色を呈し、焼成はやや良好で胎土は密であるが、若干石英粒と雲母が含まれている。口唇部は指横ナデによって仕上げられている。全体にやや磨耗している。

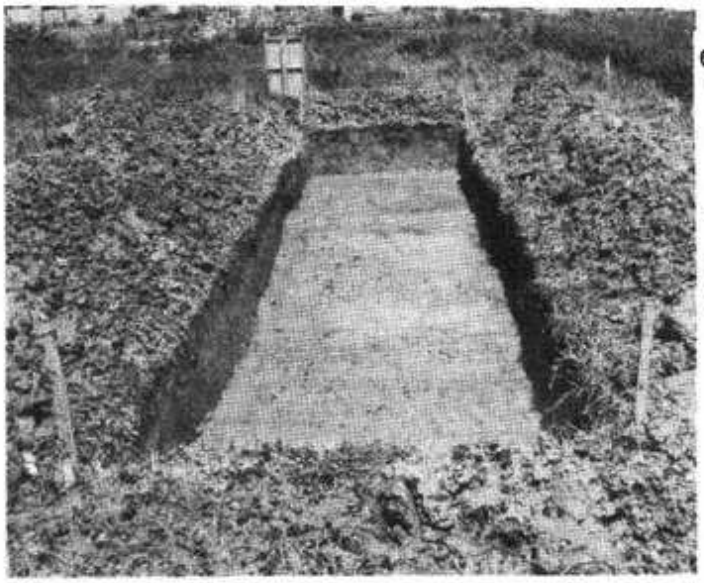
〔摺鉢〕

内外面とも紫赤褐色を呈する。巾1～2㎝の現存11条櫛目が重複して刻まれている。器厚は1㎝である。近世以降の備前焼であろう。

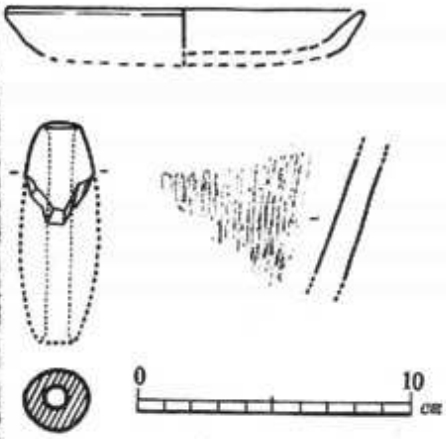
〔土錘〕

土師質でエンタシス柱状形を呈するものである。色調は淡赤褐色で、焼成はやや良好、胎土は密である。全体に磨耗しているが、わずかに指ナデの痕跡が認められる。

B－N　トレンチ（南から）



B地点出土遺物実測図



〈C 地 点〉

遺 構

本地点は中田107番地の1で、現在宅地造成のための盛土がなされている。南北に長い旧水田で区画整理以前は条里制長地型1反歩の土地であった。

トレンチは東西4 m、南北10 mのものを南北に連ねて2ヶ所設定した（C－N、C－S）。まず盛土および耕土を除去するため、機械掘りをし第2層以下を手掘りとした。耕土は10～20 cmの厚みである。

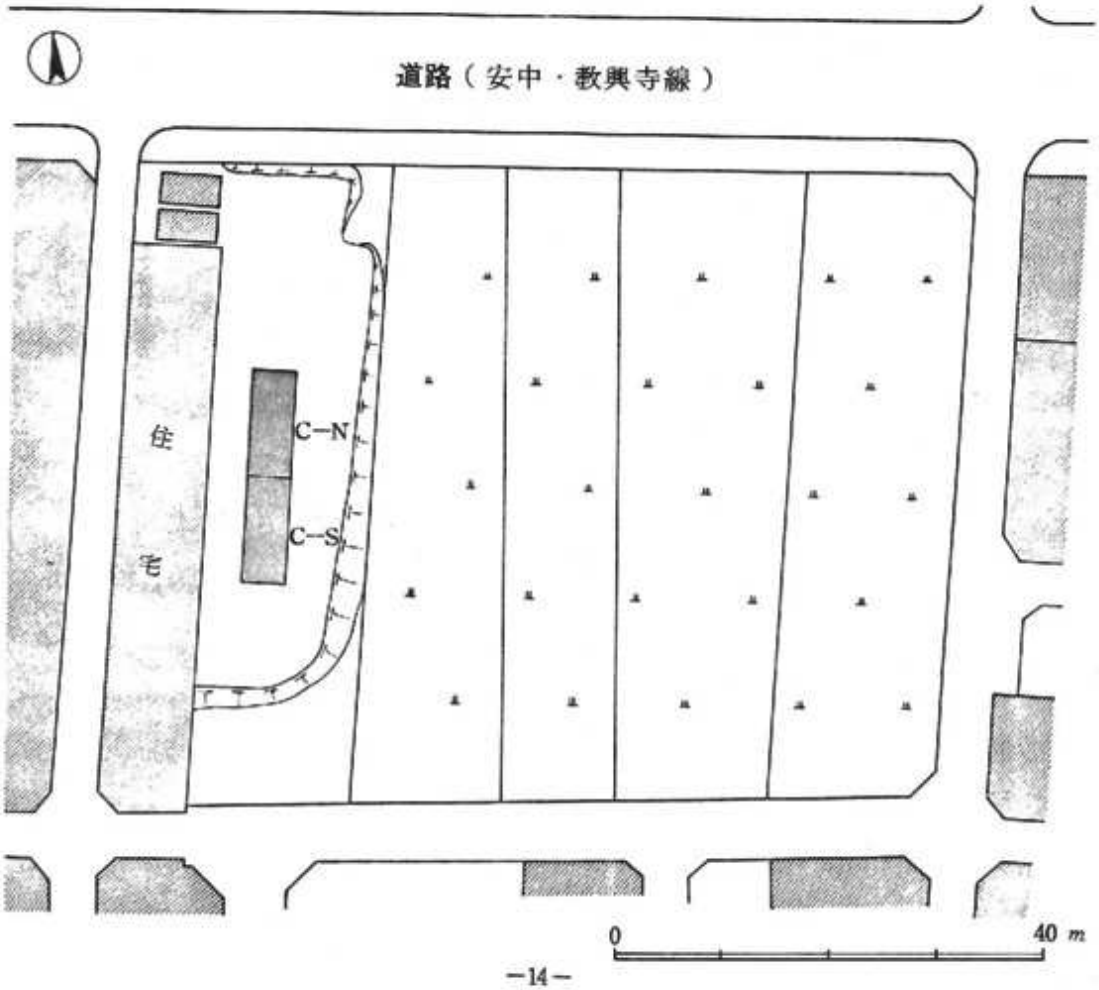
C－Nの第2層以下はまず灰茶褐色微砂質土ではじまり、厚み10～20cmを測る。ここでは土師器（灯明皿）、瓦器（椀）が出土している。第3層は灰色砂質粘土で、厚み20～30 cmを測り、土師器（高坏）、須恵器（壺、坏）が出土した。第4層は灰色砂層で下部は黄色を帯び粒子はやや粗くなる。厚さ40 cmのこの層には土師器小片を含む。第5層は茶褐色粗砂層で、土層の厚みや遺物については未確認である。第4層以下ではかなりの量の伏水がある。

C－Sは第3層まではC－Nと同様の層序であるが第4層以下では層状にちがいがみられる。すなわち第4層は灰黄褐色砂まじりのやや硬い粘質土となっている。厚みはわずか10 cmであるが、土師器など若干の遺物を含む。第5層は暗灰色粘土で50 cmの厚みをもつ。この層の下部は微砂を含み色調は茶褐色にかわる。第5層内上部からは多くの土師器と若干の須恵器が、下部では土師器のみが多量に出土した。下部出土の土師器は甕・壺・高坏・鉢・甑をはじめミニチュア型土器・環状把手などで、すべてが古式土師器であり全体に粗雑なつくりである。ミニチュア型土器には鉢の中に壺を入れたセット状態で出土したものがある。第6層は青灰色砂質粘土で若干の土師器が出土した。第7層は灰色粗砂層で遺物は含まない。この層はトレンチの北端から南へ約2 mで急角度で落ち込み大形の溝状となっている。この落ち込み内に古式土師器を含む第5層および第6層が堆積している。上記の落ち込みは上部で7.5 m以上、下部では約5 mを測るが、この溝状落ち込みがどのような性格のものであるかについては今回の調査で明確にしえなかった。しかしこの落ち込み内に多量の遺物

が堆積している事実は、この周辺に住居ないしは集落の存在を考慮してよいように思われる。

C地点調査前（中田107番地の1　南から）

C地点調査位置図



遺　物

〔複合口縁（壺）〕

（Ａ－１）は頸から２段に外反し５㎝ほどたちあがるもので、外面には凹線が認められる。頸部は比較的肉厚で、口唇部に向って薄くつくっている。色調は灰黄褐色を呈し、焼成は良好、胎土はやや粗い。

（Ａ－２）は頸部のたちあがりが比較的短かい。また口縁部も（Ａ－１）より短かく3.5㎝ほどである。灰褐色を呈し、焼成は良好、胎土はやや粗い。ともに弥生終末期に編年される壺型土器である。

〔甕〕

いずれも色調は茶褐色、焼成は良、胎土はやや粗、外面はタタキ目仕上げ、粘土帯積み上げ技法によって成形され、帯の接合部が明瞭に認められる。

（Ａ－３）は「く」字状に外反した口縁部で、口唇部が１㎝ほどたちあがっている。肩部の外面をみる限りでは櫛目やタタキ目は見当らない。肩部内面ではヘラケズリと思われる整形痕が認められる。口縁部は内外面ともに煤の付着がある。色調は暗灰褐色、焼成は良、胎土はやや密である。復原口径は約16.5㎝。(4)は全体に磨耗が著しいが、(3)に類するものと思われる。（５・６）は頸部に丸味をもっており、口唇部は外方に引き出されている。色調は茶褐色、焼成は良、胎土は密である。(7)は「く」字状に外反する口縁部と口唇部がわずかにたちあがるものである。外面にタタキ目が、内面にはヘラケズリが認められる。(8)は(7)よりも口唇部のつくりにわずかながら丸味をみせるもので、外面はハケ目と一部にタタキ目があり、内面はヘラケズリされている。（19・20）は比較的小型で、(20)は外面にタタキ目があり、内面はともにヘラケズリされている。（９・10）はかすかに内弯する広口の口縁部と比較的ゆるやかな胴張りのものである。(10)の外面はタタキのあとハケ仕上げとなっている。以上すべての色調は暗茶褐色、焼成は良、胎土は密である。（11～15）は胴部が球形を呈する一群である。(11)は口唇部を外から指押えしており、（12・13）ではこの手法がみられない。（11～13）の口縁部内外面はハケナデ仕上げである。(11・13)

の胴部外面はタタキ、内面はヘラケズリ、⑫の胴部内面はハケ目仕上げである。（11・13）の色調は茶褐色、焼成は良、胎土はやや粗である。⑫は灰褐色を呈し、焼成は良、胎土は密である。胴部外面の中央部にはかなりの煤が付着している。（14・15）は磨耗や剥落によるのかもしれないが、（11～13）より薄手である。（16～18）はいずれも胴部たて長の甕と考えられるものである。⑯は口縁が大きくのびて外反するもので、口唇部はやや尖がりぎみである。色調は茶褐色、焼成は良、胎上は微砂質の粘土で粘着力に乏しく、もろい感じである。復原口径は約16㎝。⑰は口縁部の内外面をハケナデ仕上げし、胴部外面にはタタキ目がみられる。色調は茶褐色、焼成は良、胎土は密である。復原口径は約14㎝。⑱は（16・17）に比べるとやや厚手で重厚な感じである。底部はかすかなくぼみをもつ。内外面ともにナデ仕上げである。色調は暗灰褐色、焼成はやや不良、胎土は粗で微砂を多く含む。口径は14.5㎝、器高は23.5㎝を測る。

〔小型土器〕

（B－1～8）はすべて鉢である。（1～5）は底部のつくりに若干の違いがあるものの、肉厚で口縁部は内弯しつつ「く」字状に外反するものである。口縁部は横ナデ仕上げである。（6～8）は内弯しつつのびあがったままのつくりで、内外面の一部にはヘラ仕上げの痕跡が認められる。いずれも肉厚で色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好、胎土はやや粗である。(4)は(10)とセットで出土した。(9)は指圧痕が明瞭にのこる粗製の土器である。(10)は(4)の中に納った状態で出土している。何らかの特殊な用途を持ったものかと察せられる。

〔高坏〕

（B－11）は2段に外反する皿部である。外面には5帯の櫛描波状文がめぐらされている。波状文は4～7条の櫛歯線描きであるが、上方3帯に比べて下方2帯は粗放な線となっている。淡灰茶褐色で焼成は良、胎土は比較的密である。

⑫は外反する皿部で、内外面ともにヘラミガキによる仕上げで、外面には1

条の凸帯があり、これに刻目が施されている。灰赤褐色を呈し焼成は良好である。胎土は密であるが小石英粒を多く含んでいる。ほかにこれと同種と思われる破片が数点出土している。

⒀は全体に丸味をもつ感じのもので、口縁部はやや外反してかすかなたちあがりをみせる。内面はヘラミガキとなっている。鉢になるものかとも考えられる。色調は淡褐色、焼成は良、胎土は粗い。

（14・15）は脚部である。⒁は皿部と裾部とが接合された感じで、柱状部はほとんどない。外面はハケナデののち部分的にヘラミガキがみられ、内面はハケナデのみによる仕上げである。8個の穿孔があり裾端部縁辺には刻目がめぐらされている。⒂は柱状部と裾部であるが、外面はハケナデののち、ていねいなヘラミガキで仕上げられ、内面はハケナデのみである。3個の穿孔がある。いずれも色調は茶褐色、焼成は良好、胎土は密である。

〔器台〕

（B－16）は器台の柱状部であろうと思われる。円筒形の柱状部に径1㎝の棒状のもので穿孔をしたあと、孔の上面だけを指で2倍ちかくの大きさにひろげている。柱状部の上方に粘土帯を貼りつけ、それに刻目を施している。色調は赤褐色、焼成はやや良、胎土は密である。

〔手焙形土器〕

（B－18）は手焙形土器で胴部外面に刻目を有するものである。色調は赤褐色、焼成はやや不良、胎土は粗である。全体に磨耗が著しい。他に同類の破片が2点出土している。本例に類似するものは、近接の亀井遺跡・恩智遺跡・船橋遺跡に出土例がある。

〔環状把手〕

（B－17）は口縁部付近に取り付けられた環状の把手と考えられるものである。ナデ仕上げによって断面が1.7㎝の円形となっている。本体の容器との接合部には指圧痕が認められる。容器の上縁部から把手外縁頂までは約4㎝を測る。色調は淡茶褐色、焼成は良好、胎土は密である。これに近似するものとし

て、大阪府泉南市向山遺跡、岡山県津山市押入西遺跡、同県倉敷市前山遺跡などに類例があるが、いずれも弥生式土器となっている。

〔土錘〕

（B－19）は長さ6.5㎝、径2.7㎝の円筒状の土錘、径0.8㎝の穿孔を有するものである。外面はナデ仕上げによる整形をしている。色調は暗灰褐色、焼成は良好、胎土はやや密である。

〔坏〕

（B－21・22）は須恵器の坏蓋である。㉑は肩張りがみられないのに対し、㉒は肩部にかすかな張りを持っている。口唇部はいずれも外反する。㉑は口径12.5㎝、㉒は14㎝、㉓は坏身で口縁部のたちあがりは内傾しつつやや外方に反りを見せる。灰色で焼成は良い。口径は12.3㎝、㉒とセットになるものであろう。

〔円筒埴輪〕

（B－20）は円筒埴輪で、幅1.5㎝、高さ0.5㎝の帯が貼りつけられナデ仕上げ、外面は初め縦方向に、次に横方向に粗いハケ目による仕上げがみられる。焼成は比較的良好、胎土は密である。磨耗が著しい。

〔底部〕

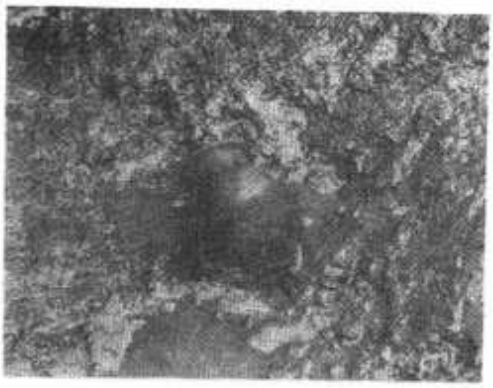
底部について概観すると（2・3）のように薄手のものが数十点ある。(2)は丸味をもつ尖底で、色調は黒褐色、焼成は良、胎土は密であるが全体にもろい。これは二次的に火焼をうけた結果と考えられる。（9・10）はロウト状を呈するものである。(9)の台部は胴部に比べて厚手で、やや磨耗しているが、台部外面はタタキのあとをナデ仕上げしている。台部の底は平板上に置いて整形しているため平扣となっている。(10)は台部の底が尖っている。ともに色調は赤褐色、焼成は不良、胎土はやや粗である。

〔甑〕

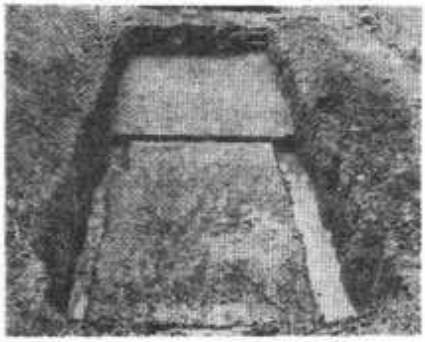
（6・8）はいずれも外面にタタキ目を有し、(6)の内面にはヘラによる掻取り痕が認められ、(8)はやはり内面を指ナデ仕上げしている。穿孔は(6)が径0.5㎝、(8)は径1.3㎝である。(7)は内面全体に指圧痕があり凹凸がめだつ。外面には縦

にタタキ目があり、あとでナデ仕上げをしている。灰茶褐色を呈し、胎土はやや粗であるが焼成は良好で堅緻である。

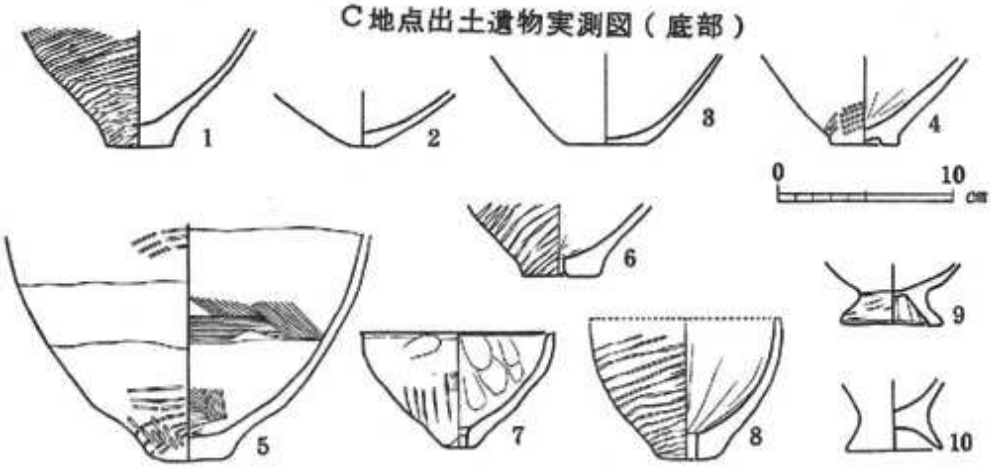
C－S　遺物出土状態
（小型壺・鉢のセット）



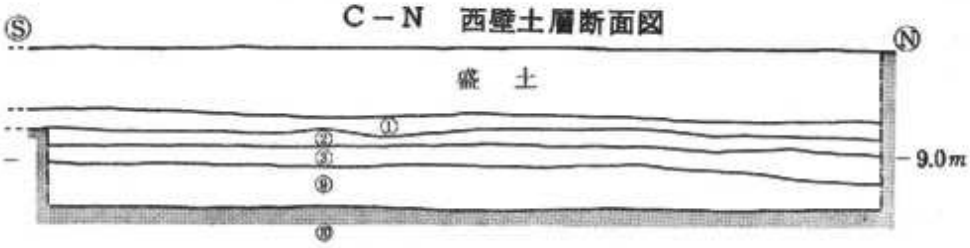
C－N　トレンチ（北から）



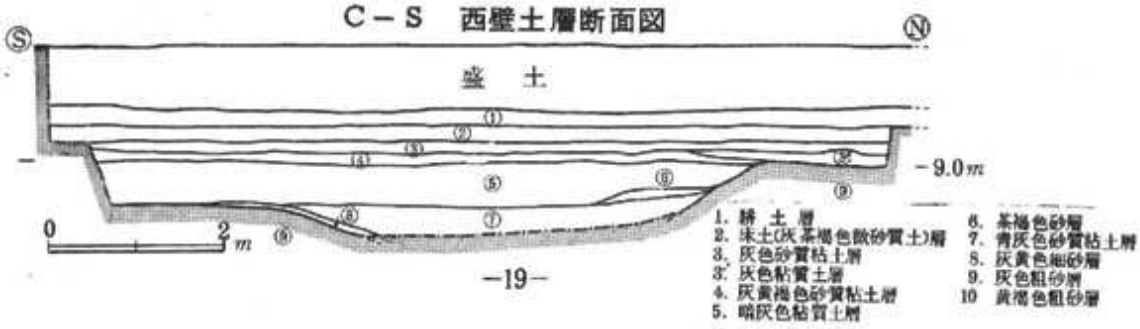
C地点出土遺物実測図（底部）



C－N　西壁土層断面図



C－S　西壁土層断面図



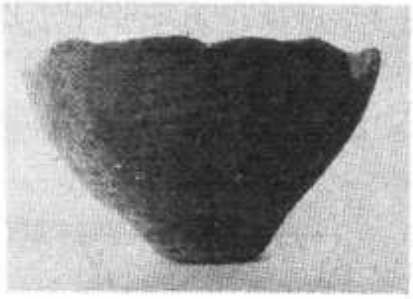
土器と考察

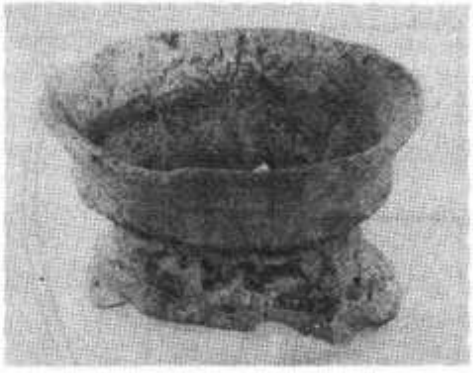
弥生式後期の土器ないしは古式土師器など名称の定まらない一群の土器が細片となって多量に出土している。土器に付すべき名称はとも角として古式古墳築造期初頭に属する土器群であるが、この土器については同一集落遺跡内にありながら中田遺跡調査地内に比べて形状、胎土、焼成などに若干の差異が認められるところから遺構は伴なわないが考察を加えておきたいと思う。

土器は形状、製作手法、焼成などから大きく2種の群に分けることができる。そして器種は甕形土器に限られ、壺形・坏形の土器は1～2点にすぎない。

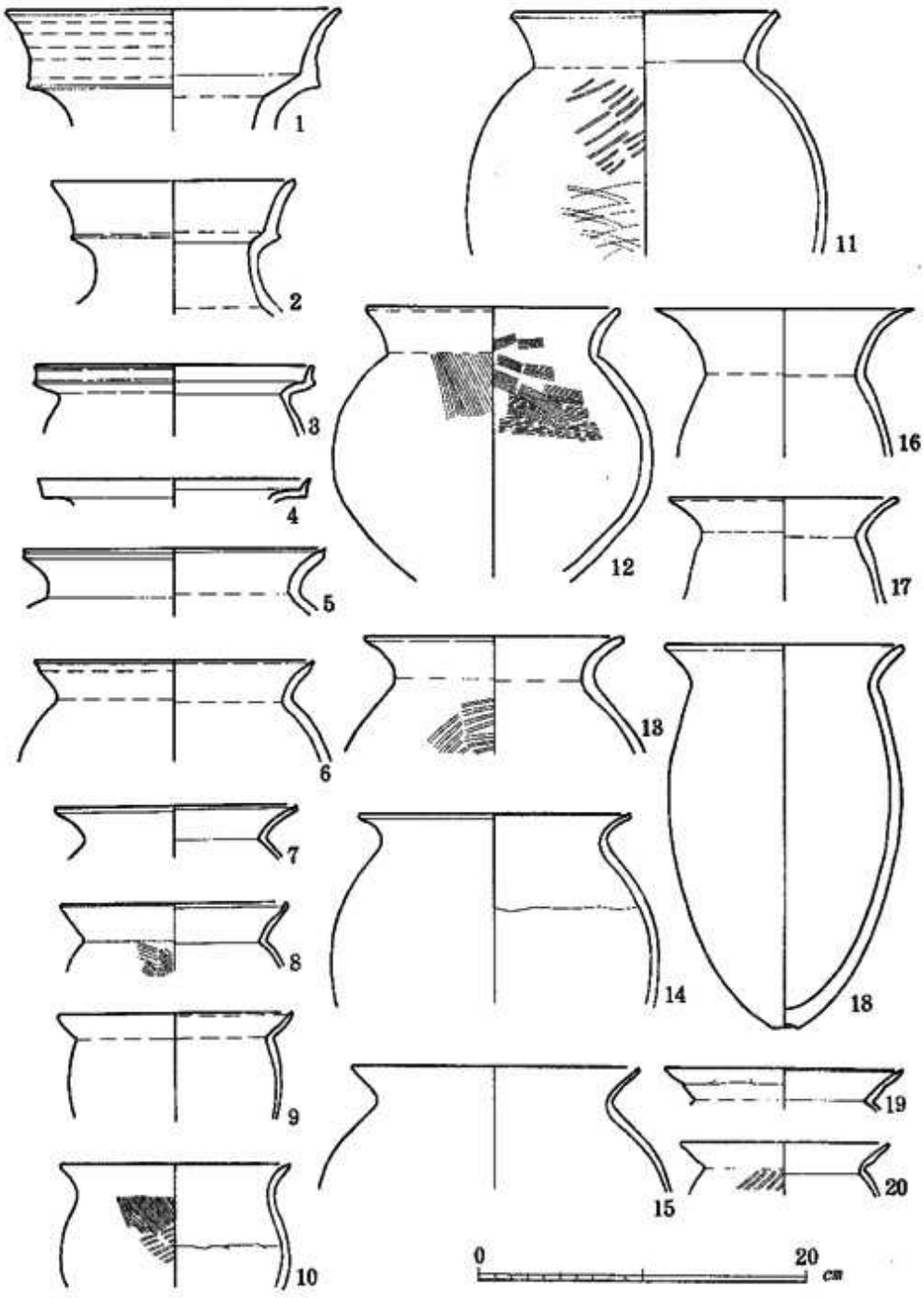
まず甕形土器の2種の大別は、(A)器表に叩き目文を遺し石英砂粒を混入した粗い胎土である。製作は輪積手法で二次的に火熱を覆っており器は暗赤褐色を呈するもので明らかに煮沸に用いた器であることがわかる。破片は細片で、平均5㎝平方単位のもので10㎝を越えるものはごく稀であり、復原は極めて困難である。調査トレンチの関係もあって関連破片のすべてを採集したわけではないので復原不可能は当然であるかも知れない。破片は二次火焼をうけている関係か胎土および焼成時の火焼の低さによるものか非常に脆い。従って破片口も磨滅している。以上は一般的にこの時期の土器に共通した現象であろうが土器の原形が著しくそこなわれている点は注目されるところである。つぎに(B)の土器群は壺形土器1点と、鉢形土器8点とである。いずれも粗製で小形という共通点のほかに、同一手法で同一人の製作によるものであることが一目瞭然としている。（B図参照）製作上の共通点および土器の特徴については別項で述べたが明らかに(A)の土器群とは異なる粘土素材と手法で、すべてに異質のグループ（土器群）である。この群の土器の製作目的は明らかでないが器は(A)群のように二次火焼をうけていなく、しかも(A)群のように細片化せず殆んど完形に近いこと、粗製であること、一ケ所にまとまった形で堆積していることなど特殊な用途上の器財であった可能性が強い。このことは(C)地点出土遺物の中に細片であるが内・外面に朱の塗布されたものや、手あぶり型土器、また把手付の異形土製品のあることなどからも推定されるものがある。

C地点出土遺物

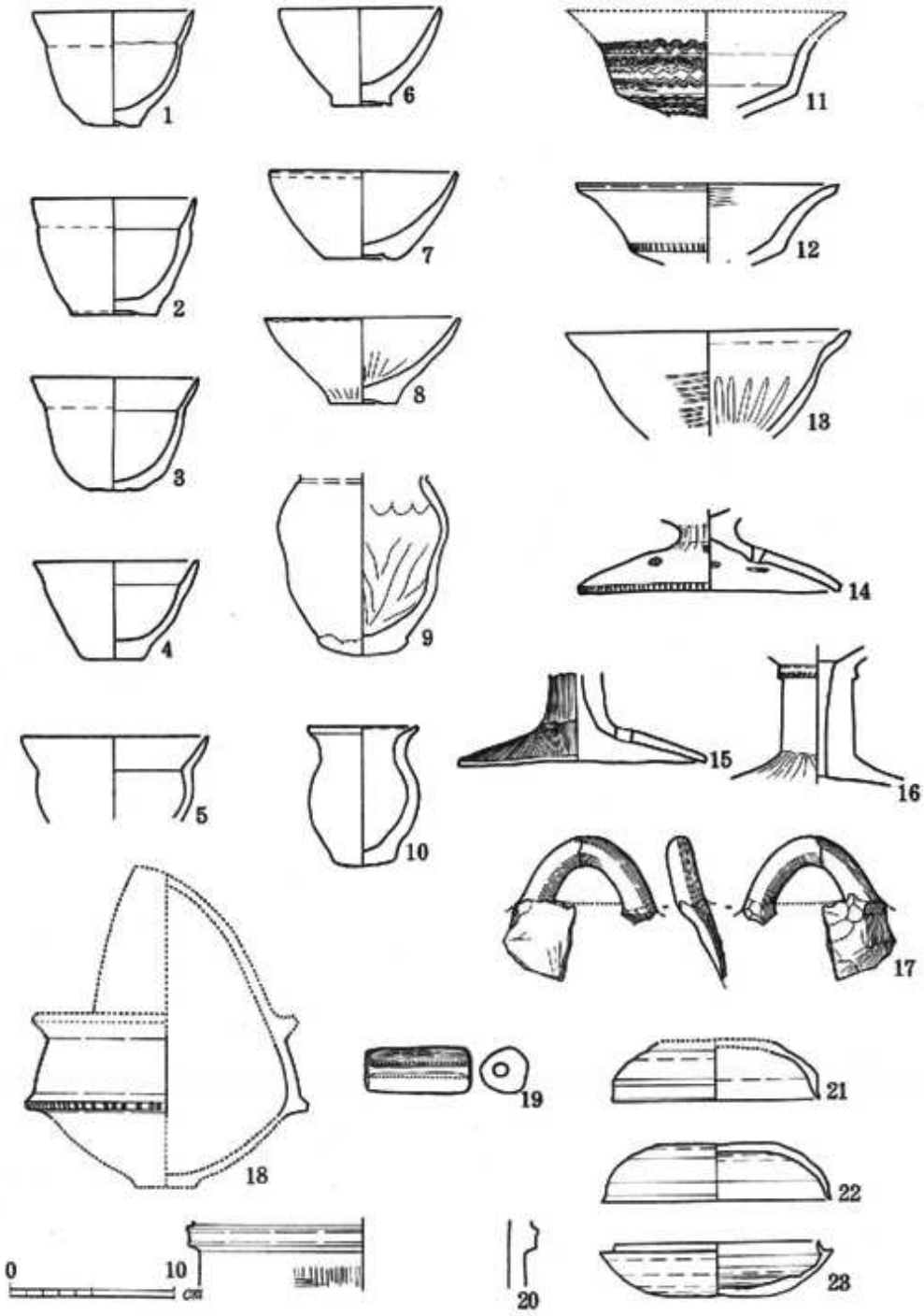




C地点出土遺物実測図 A



C地点出土遺物実測図 B



〈D 地 点〉

遺 構

本地点は刑部219番地である。現在休耕地になっていて、北・西は区画整理道路で、東・南は住宅および工場になっている。

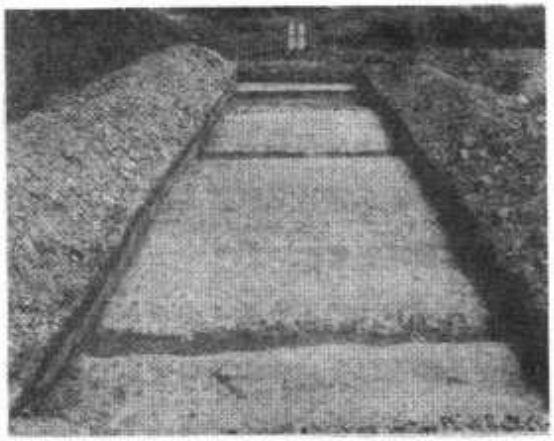
調査にあたっては、南北4m、東西10mのトレンチを東西に連ねて2ケ所設定した（D－W、D－E）。さらに、このトレンチの中央部から南方に東西4m、南北20mのトレンチを設定した（D－S）。いずれのトレンチにおいても、第1層（耕土）・第2層（灰茶褐色土）・第3層（灰色砂まじり粘質土）内からは土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・屋瓦片類などが出土し、上層は他地点に比べ中・近世の遺物が目立つ。第4層は灰色砂層で、上面は酸化鉄分の沈殿によるかたい部分が認められた。この第4層上面で、ほぼ磁北に一致する3条の溝が検出された。第5層以下は、灰色粘土まじり細砂層・灰黄褐色細砂層・茶褐色砂層などの厚みのうすい層があり、これらのさらに下層は灰色粘質土、青灰色粘質土となっている。

D－Eの東端で一部深く掘り下げたところ（東端グリット）では、第5層にあたるレベルで、深さ20cmばかりの落ち込み内の灰色粘土内より馬の歯・瓦器などが出土した。さらに下層の炭を含む青灰色細砂まじり粘質土では古式土師器（甕）が出土した。なお、この青灰色細砂まじり粘質土の下には青灰色砂層があり、さらに下部は黄褐色粗砂層となっていた。この粗砂層は南から北へ落ち込んでいることが認められた。この層内には伏水があった。D－E、D－Wの境界で一部を掘り下げたところ（中央グリッド）では東端グリッドと同様の層序であったが、ここでは青灰色砂層で土師器（高杯）が出土している。

D－Wの西端で深く掘り下げたところ（西端グリッド）東端および中央グリッドでみられた青灰色粘質土の下層は黄褐色の粗砂層によるやや複雑な層序となり、自然木などが含まれていた。これら木材の中には、杭や横木と考えられるものや、これらの間に充塡されたかと察せられる小枝などが認められるところから、これら木材の一群が河川流路に設けられた「シガラミ（堰）」である

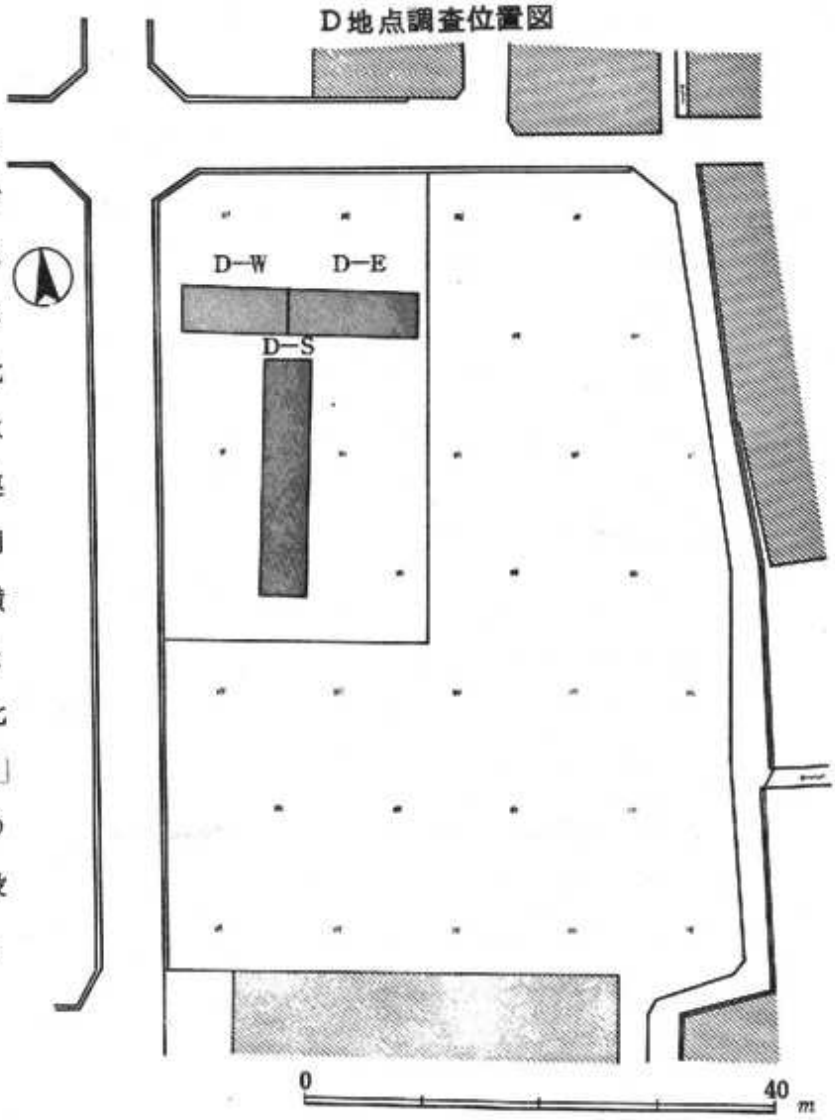
D地点調査前（刑部219番地 西から）

D－E・W トレンチ（西から）



可能性が強くなった。この「シガラミ」は北西方向に続くように察せられたので北西部にあらたにグリッドを設定した（北西端グリッド）。結果は想定どおりで「堰」の連続部が検出された。使用されている木材は杭・横木・小枝などで「堰」とすれば主軸は南東から北西方向にある。従って「堰」は南西から北東方向への流路に直交するように設けられたものであろう。

D地点調査位置図



遺　物

〔甕〕

（D－1）は口唇部外面に刻目を有し、そこからややさがったところに3条のヘラ沈線が認められるもので、色調は黒褐色、焼成は良、胎土は密である。全体に磨耗が著しい。「シガラミ」付近の黄褐色砂層からの出土であるが、これは古大和川に沿う近くの東弓削遺跡から運ばれてきたものであろう。弥生前期の土器としては中田遺跡ではじめてのもので、今後中田遺跡およびその周辺地域には注意を要するところである。

〔壺〕

（D－11）は、「く」字状に直にのびあがった口縁部をもち、胴部は球形を呈するとおもわれるものである。口縁部外面にはヘラミガキが明瞭に認められ、胴部内外面はハケ目仕上げとなっている。色調は淡茶褐色、焼成は良、胎土は密である。

〔甕〕

（D－3）は2段に外反する口縁部である。色調は淡赤褐色、焼成は良、胎土は密であるが、全体に磨耗している。

（D－4～6）は、「く」字状に外反する口縁部で、口唇部でわずかながらたちあがりをもつ。胴部の外面はハケ目、内面はヘラケズリによる仕上げである。色調は茶褐色、焼成は良、胎土は密である。器面に煤が付着している。口径はいずれも15㎝前後である。

（D－7）は「く」字状に外反しつつ、口唇部近くで内弯する口縁部で、口唇部内側は丸みをもつ。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリによって仕上げている。色調は灰褐色、焼成は良、胎土は密である。外面には煤が付着している。復原口径約14㎝。

（D－10）は胴部から2㎝ばかりまっすぐ上にのびあがり、そして外反する口縁部をもつもので、口唇部は外から指ナデによって整えられている。外面は

ハケ目仕上げ、色調は淡茶褐色、焼成は良、胎土は密である。復原口径約14.5㎝。

（D－8）は茶褐色を呈し、焼成は良、胎土は密だが、磨耗著しい。

〔鉢〕

（D－14・15）はいずれも丸底で、内外面ともに磨耗しているため明確にしがたいが、ヘラミガキされているようである。口縁部については⒁はやや尖がりりぎみであるが、⒂は丸みをもっている。双方ともに色調は茶褐色、焼成は良、胎土は密である。⒁の口径は15㎝、器高は6㎝、⒂の口径は8.5㎝、器高は4.7㎝。

〔高坏〕

（D－12）は皿部で、⒀は脚部である。いずれも色調は赤褐色、焼成は良、胎土は密である。⒀の外面にはヘラミガキ、内面にはハケ目がみられる。同一個体であるかもしれない。

〔複合口縁（壺）〕

（D－2）は比較的外開きの大きい口縁部をもつもので、色調は茶褐色、焼成は良、胎土は密である。

〔須恵器（坏）〕

（D－16・17）は坏身である。⒃は⒄よりも口縁部のたちは長い。いずれも色調は灰色、焼成は良、胎土は密である。復原口径は⒃が13㎝、⒄が14㎝である。

〔摺鉢〕

（D－20）は底部付近で、内面には放射状で現存10条単位櫛目によるかきあげである。㉑は口縁部で、比較的薄手である。内面には5条櫛目を単位としたすじ目がつけられている。

〔土釜〕

（D－18）は土師質の羽釜である。口縁部付近には凹線が3条認められる。色調は淡茶褐色、焼成は良、胎土は密である。復原口径31㎝。

〔屋瓦〕

（D－19）は均正唐草文軒平瓦である。

〔木製品〕

自然木及び加工木はほとんどが「シガラミ」用材でD－W両端あるいは北西端グリットで検出されたものである。D－Sでも若干が出土している。

〔杭材〕

(1)は現存長15㎝、一辺3.5㎝の角材で、カット面は5面みられる。面の長さは5～8㎝である。

(2)は全長135㎝、径6㎝の丸材で全体にわたって7面にカットされている。面の長さは13～15㎝である。

(3)は現存長26.5㎝、径5.5㎝で、現存部では3面のカットが認められる。カット面の長さは9～10.5㎝である。

(4)は現存長82㎝、径3.5㎝の自然木である。3面のカットがあり、のこる半分は自然面のままである。カット面の長さは6～7㎝である。

(5)は現存長18.5㎝、径5㎝で、杭先端が欠損している。カットは2面である。

(6)は現存長39㎝、径7㎝で、片方だけをカットしたものである。先端付近では3面のカットがみられる。

(7)は現存長62㎝、径2.3㎝で、1面だけのカットであり、他は自然面を残している。

(8)は現存長35㎝、径2.5㎝で、小枝を除いただけの自然木である。先端は鋭利である。

(9)は現存長29㎝、長径3㎝、短径2㎝の断面　円形を呈するもので、全面にわたって整形痕が認められる。

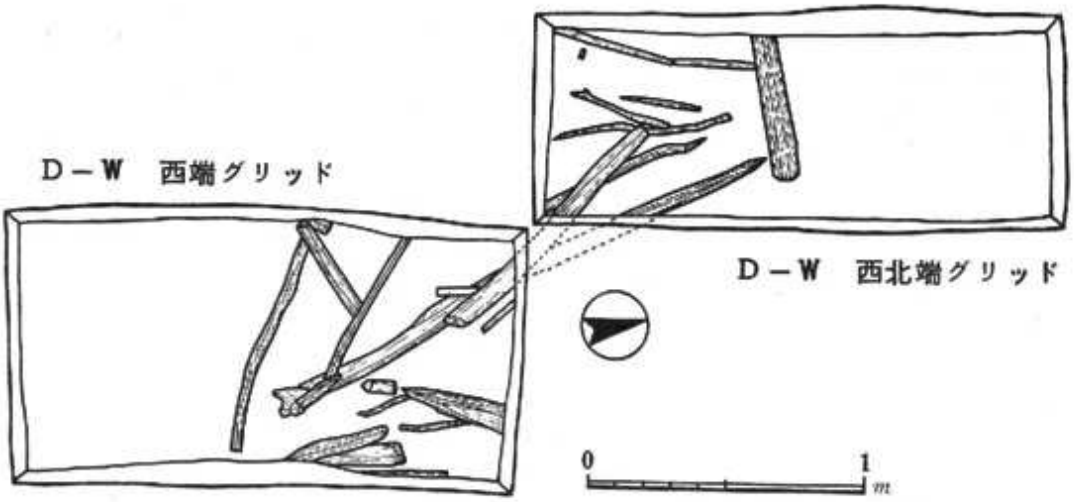
(10)は現存長30.5㎝、巾6～7.5㎝、厚み1.3㎝を測る板材で、下端は鋸ようの工具で切られている。

以上のほかに、現存長182㎝、半径6㎝の割材（原丸材の$\frac{1}{6}$）や現存長67㎝、半径5.5㎝の割材（原丸材の$\frac{1}{3}$）があり、また現存長74㎝、径5～6㎝の

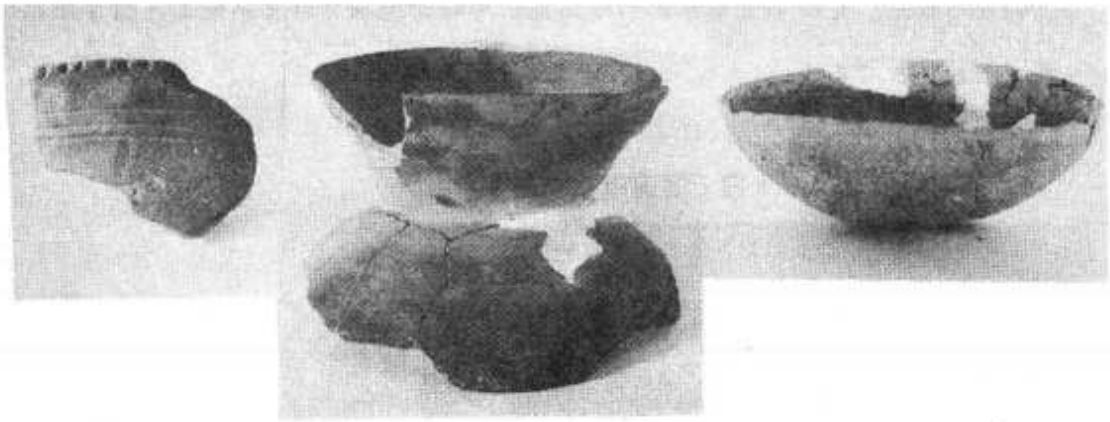
丸材で、片面に敲打面を有するものも検出されている。

前述の(1)～(7)や敲打面を有するものなどは「シガラミ」の杭材と考えられ、割材はその出土状態が横位置にあったことを考えあわせると横木材であったかと察せられる。これら大形木材の間隔部に小枝が充塡されていたことはすでに述べたとおりである。

D－W　西端グリッド内（堰遺構の一部）



D地点出土遺物

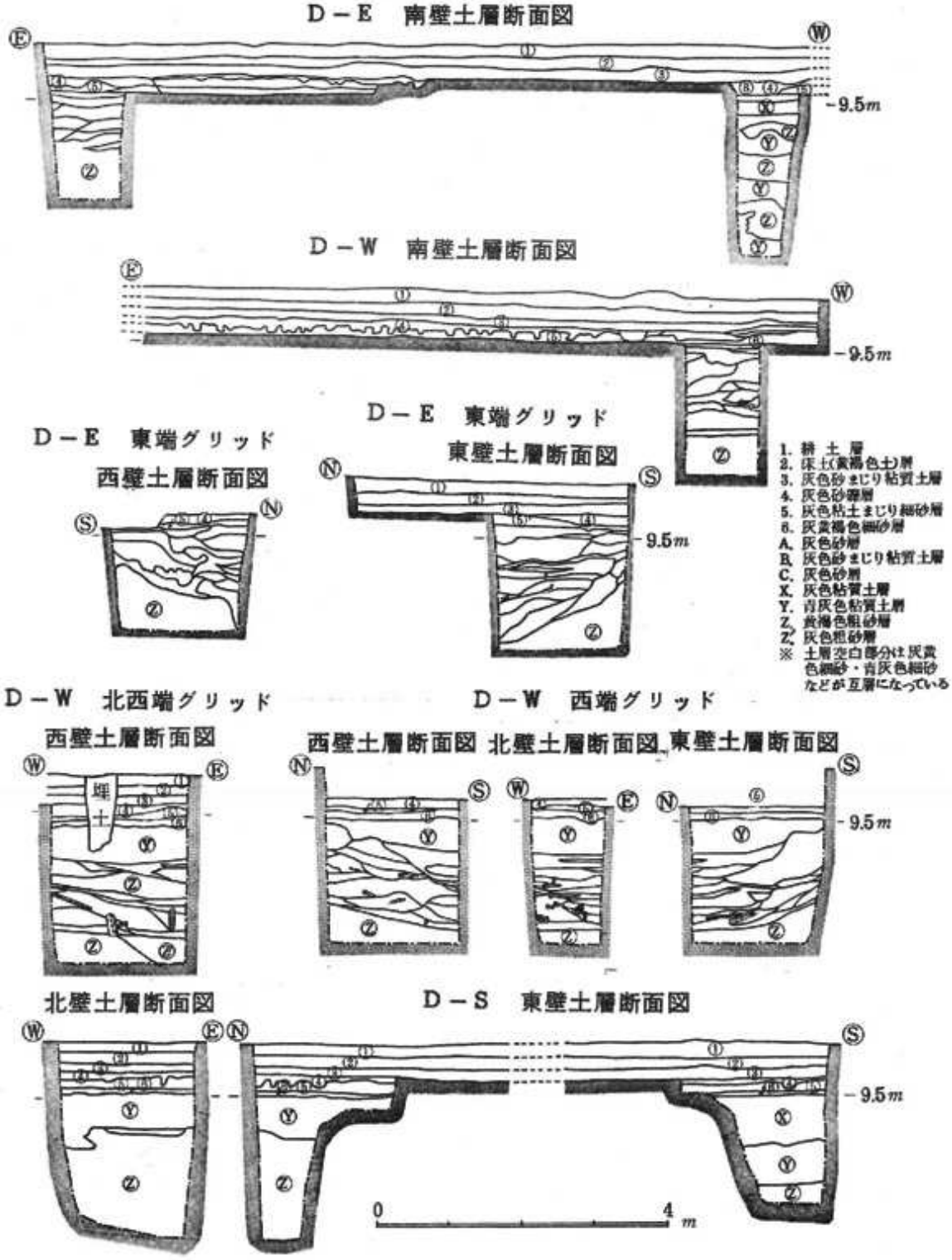


杭列遺構と考察

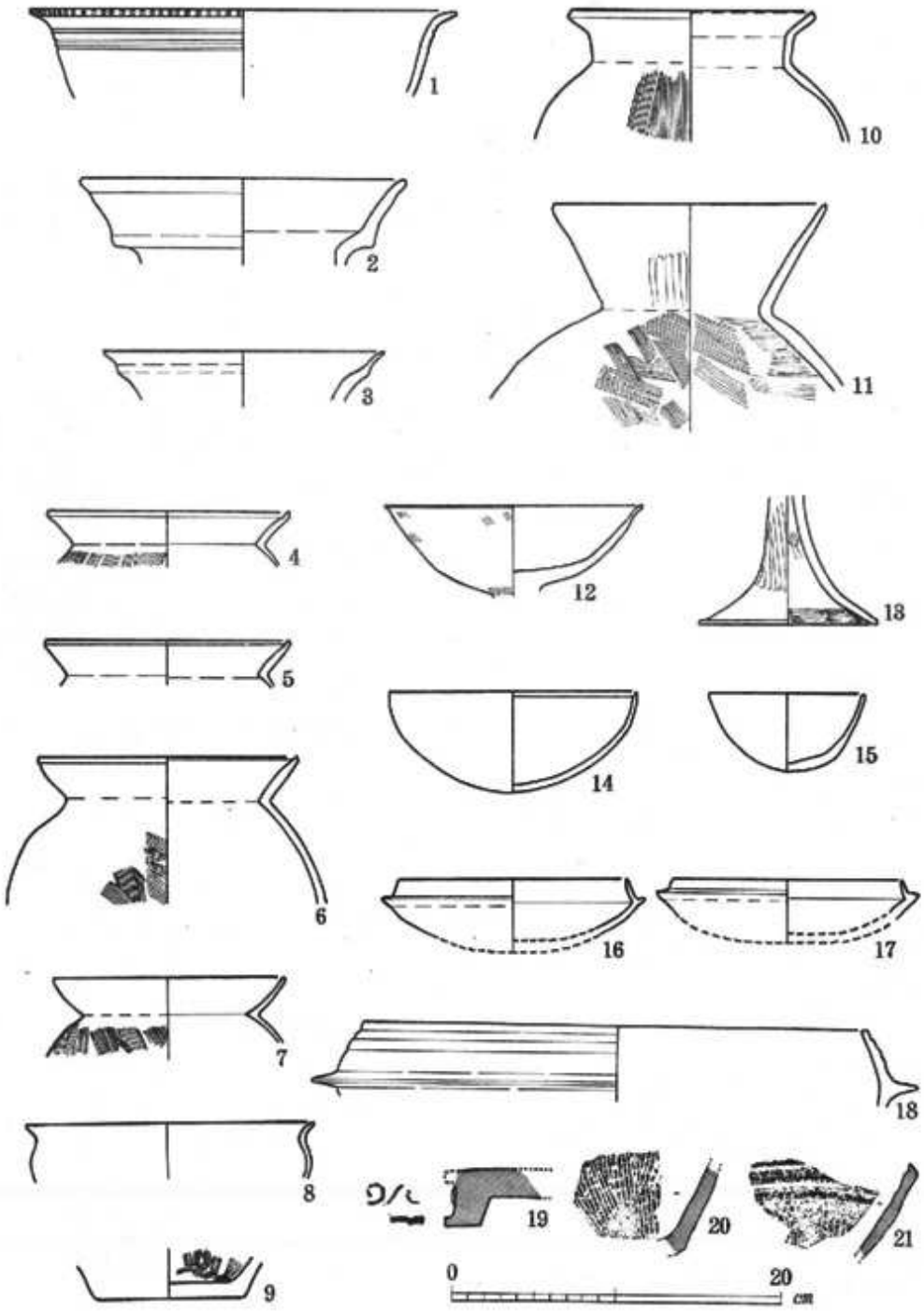
古大和川の時期における不安定な流路に対して、これを積極的に利用する手段としての多目的堰の存在は当然考えられることであるし、中田遺跡内でも大型の堰の一部が認められている。

〈D地点〉における杭列遺構も推定流路に対し直角方向に設けられており、やはり古墳時代前期の堰で、灌漑、氾濫の防禦など、いくつかの使命を負わされた大小の堰の中の一つであったと思われる。この種の大小堰は古大和川期における河内平野には、いたるところに設けられていたものと見てよい。

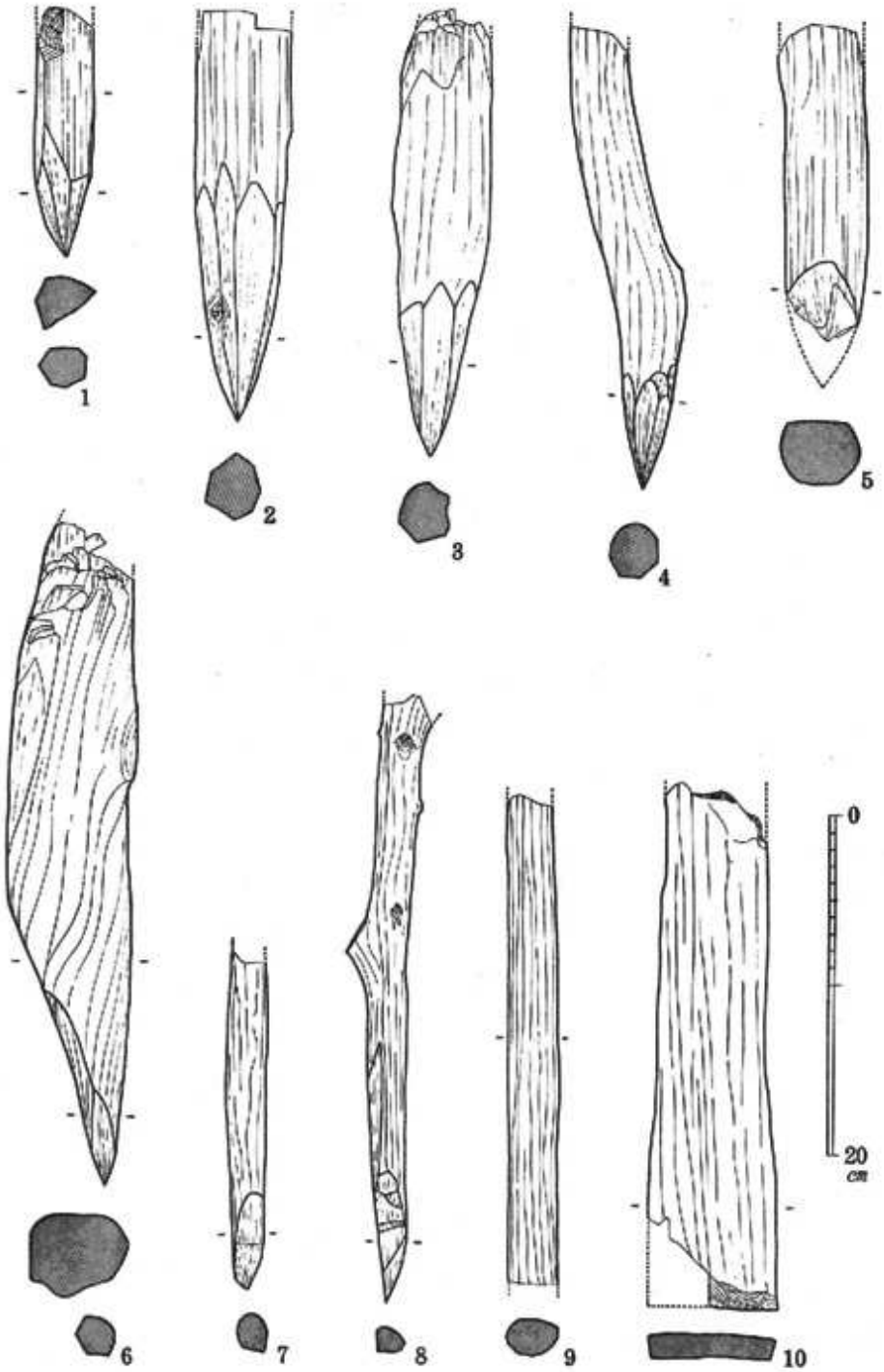
D地点土層断面図


D－E　南壁土層断面図
D－W　南壁土層断面図
D－E　東端グリッド
東壁土層断面図
D－E　東端グリッド
西壁土層断面図
D－W　北西端グリッド
西壁土層断面図
D－W　西端グリッド
西壁土層断面図
北壁土層断面図
東壁土層断面図
D－S　東壁土層断面図
埋土
-9.5m
0
4
m
1. 耕土層
2. 床土(黄褐色土)層
3. 灰色砂まじり粘質土層
4. 灰色砂礫層
5. 灰色粘土まじり細砂層
6. 灰黄褐色細砂層
A. 灰色砂層
B. 灰色砂まじり粘質土層
C. 灰色砂層
X. 灰色粘質土層
Y. 青灰色粘質土層
Z. 黄褐色粗砂層
Z'. 灰色粗砂層
※ 土層空白部分は灰黄色細砂・青灰色細砂などが互層になっている

D地点出土遺物実測図



D地点出土木製品実測図



ま　と　め

今回の範囲確認調査結果の概要は、ほぼ次のとおりである。

中田、八尾木、刑部地区にわたって実施された区画整理地の内、西端の萱振曙川線沿いの深層部は古大和川の河川敷かと察せられる流砂帯がひろがっており、その一部からはかつて堰の検出もあった。この一帯の上層部には鎌倉、室町時代の遺物の包含がみられるが遺構は伴なわないようである。つぎに楠根川に沿う両岸は〈B地点〉でみられるような低湿田地帯となっていたようで、ここにも遺構の存在は考えられない。

北方は〈A地点〉の一帯で小阪合遺跡と区切られているようである。

東方の〈C地点〉で多量に出土した土器と、〈D地点〉での土器および堰遺構の存在は楠根川以東における玉串川およびその氾濫原との関係から重要となってくる。

刑部地区の集落は江戸時代における大和川付替え以後の定着であろうから、この地帯の古代と玉串川の歴史的関係については、八尾市の平野部における先史時代を知る上での手がかりとなろう。同様のことは長瀬川と周辺平野部についてもいえることである。

出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が中心で、とくに〈C・D地点〉出土の遺物からは、この地帯における生活期間が比較的短期間であったことを物語っている。

河内平野生成の変遷は、部厚く堆積した土砂の分析、観察などによって解明されつつあるが、自然堆積による造成を待つだけの生活史であったか、ないしは何時かの時期に肥沃な耕地化への人為的手段が講じられたかなど未解決の課題である。「記・紀」も応神・仁徳期までは河内平野のこれらの内容には触れていない。したがって中田遺跡地での堰や、今回〈D地点〉で検出された堰遺構は、古代の河内平野における積極的な開発と土地利用の一端を窺うことのできる資料ということができる。